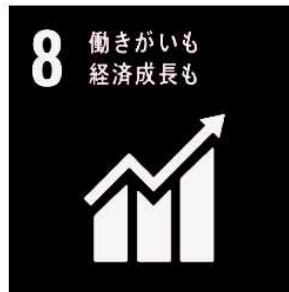




働き甲斐不足

ようやく教職のブラックぶりに脚光は当たったが

ふちんかん



← 本当は**エンジ**色です

まったくもって教員という仕事については、働きがいばかりで働いた甲斐がない。

※「甲斐がある」の意味は「取り組んだ分に相応する結果を得る」ことで、その様子を表す言い回しとして用いられます。力や時間などを費やした分だけ、満足感ある効果・対価を得ることができた様子を表す時に使う表現です。

教員という仕事について、その労力の多くは対象となる児童生徒のために向けられるものであり、その成果は児童生徒の成長である。しかしその成果は、短時間に・目に見える形で現れるものではない。それでも過去に比べて、現在の授業や生徒との関わりを通して、児童生徒の将来がより良いものになるように、多くの教員は努力・工夫を重ねている。

一方でどんな仕事でも、熱意を持って取り組めば取り組むほど、時間は無制限に必要なことは自明である。だから普通は、法定時間内に取り組める内容となるように、仕事量・人数が調整され、それでも足りない場合は、手当があてがわれるように法で定められている。しかし教員という仕事は、給特法により4%の給料上乘せで働かせ放題となっている。



公立学校の教員の給与について定めた法律。1971年に制定された。教員の仕事は勤務時間の管理が難しいという特殊性を考慮し、休日勤務手当や時間外勤務手当などを支給しない代わりに給料月額4パーセントを教職調整額として支払うことを定めている。法律が成立した当時の平均残業時間が月8時間だったことから4パーセントが妥当とされたが、その後、教員の仕事内容が年々複雑化し、勤務時間が長引く一方であることから、この法律が実態と合わなくなったと指摘されている。

んなアホな！という制度である。今時、8時間なんて週の半分も働いたら消化してしまう。私の勤務先は同じ行政区の他の学校と比べるとホワイトな職場であり、毎日11時間程度しか職場に滞在しない。まあ休憩時間などは無いのであるが（書面上は休憩している時間もぶっ通しで仕事をしている）。そして毎日、朝早く起きて1時間程度の授業準備をして7時半には学校にいる。この段階で、人によっては教職のブラックさの片鱗が感じられると思うが、現状はこれに留まらない。週末は自由に使えることはまずない。まず部活動の指導である。これは「特別に」手当が付いて、4時間以上働くと3200円の支給がある。先日は朝7時に現地集合で、午後2時まで練習試合があったのだが、時給換算にすると460円である。休日の時間外労働で得られる報酬は最低賃金の半分である。他にも



〇〇不足



休日はテストの作成も行う。テスト作成のようなまとまった時間は、勤務時間内にはムリなので、私は年間15日以上、休日に8時間程度の作業をしている。ちなみに複数教科を教えていた年は、年間に30日、テスト作成のためだけに無給で休日を消費していた。

ご覧になったように教職という仕事は、一息つくための時間が、一日の中にも一週間の中にも無い。そして一番の問題は労働に応じた報酬もほぼ無いのである。

私が教員を志した40年前は、学校の先生は夏休みがあって（仕事としては）いいなあと思った。私学の教員だった母親を見ても、普段は忙しくしていたが夏休みは家にいてくれて、子供心に嬉しかったことを思い出す。しかし時代の変化とともに教員の仕事はどんどん増えていった。私が勤めだした30年前と比べても、現在は家にいる時間が明らかに減っているし、その在宅時間にして仕事をしたりして、疲れを癒やすにも十分とは言えない。加齢も加わり、帰宅して夕食を摂ったらボタンキューである。



さてこんな状況が一般的（まだ私の場合はマシだと思うのだけど）にもかかわらず、文部科学省は、一人あたりの仕事量を一定にするための人員増加を図るわけでも、残業手当をつけるわけでもない。前述の給特法で定められているからである。

教職が「やりがい搾取」「定額（少額）働かせ放題」と言われる所以である。

「その仕事を選んだ段階で分かっていたこと」だの「高い公務員の給料のさらに上乗せまでもらっていて文句を言うか」だの「それならやめて他の仕事すれば」だのネットのコメント欄には辛らつな言葉が並ぶ。

しかし本当にこれで良いのか？

今、新規採用教員の競争率が激減しているという恐ろしい事実がある。そして相応するように30歳代までの教員（それも非常勤職員など多い）による不祥事の報道が目立つ。

明らかに新たに教員になる人のレベルが落ちている。非常勤職員の数自体も増えているのだが、それは正規の職員が足りないからである。ここ数年、若い人の教職に就いた理由を聞くと「部活動がしたいからっす」という人がやたら多くなった。部活動自体は本来の教員の仕事ではないのだが（それは別の機会に書くとして）、「部活動がしたい」という理由だけでも熱意を示せば採用試験に通ってしまうのである。

もう現場は本当に人がいない。うちの職場でも定員の数を満たす教員がいない。ただ正直言うと、どこの馬の骨とも分からない人材が来て、そのお世話に時間がかかったり、引っかき回されるより、多少の仕事が増えるほうがマシとも感じる。パンチドランクである。

もう一度問おう。本当にこれで良いのか？

明らかにこれまでよりレベルの低い若い教員が増えている。その割合がある点を超えた段階で、学校は機能不全に陥るだろう。昭和の末期から平成にかけての荒れは「生徒が主役！」の華々しいものであったが、次は教員が主役の地味～な荒れで学校は崩壊するかもしれない。

もう私は退職までのカウントダウンが始まっていて、自身の待遇改善には期待はしていないが、あなたのお子さん、お孫さん、将来の日本国民を育てる礎であるべき教職の貧乏を知っていただきたいと切に思う。